

2025 年度 一 般 選 抜 （後 期）

国 語

〈注意事項〉

- 1 解答はじめの合図があるまでは、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は1 ページから 13 ページまでです。
- 3 監督者の指示に従い、解答用紙に次の事項を記入し、マークしてください。

記入，マークするときは黒鉛筆（H，F，HB に限る）を使用し，誤ってマークした場合は消しゴムでていねいに消し，新たにマークし直してください。

- ①解答用紙の氏名・受験番号欄に「氏名」「受験番号」を記入し，受験番号マーク欄にマークしてください。

※記入例（受験番号 610123 の場合）

氏 名	科 学 大					
受験番号	①	②	③	④	⑤	⑥
	6	1	0	1	2	3

受験番号 マーク欄	①	0	1	2	3	4	5	●	7	8	9
	②	0	●	2	3	4	5	6	7	8	9
	③	●	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	④	0	●	2	3	4	5	6	7	8	9
	⑤	0	1	●	3	4	5	6	7	8	9
	⑥	0	1	2	●	4	5	6	7	8	9

- ②入試区分欄の「一般後期」をマークしてください。

入試区分	● 一般後期	
教 科	● 国語	09

- ③解答用紙は折り曲げたり，汚したりしないでください。
- ④解答用紙は，表面がマーク式の解答欄，裏面が記述式の解答欄になっています。
- 4 問題冊子は持ち帰ってください。

## 問題一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本の研究者がノーベル賞を取ったときの記者会見で必ず聞かれるのが、「何の役に立つのか？」という質問である。それに対して、そんなことを聞くのは科学を知らない野暮なヤツだという声が毎回上がりつつも、一向になくなる気配はない。そしてまた、二百年前には、そもそも人様の役に立つ科学が良い科学という考えが普通だった。

自然科学が実用的な価値から切り離されて、真理を追究し、知識を増やす活動そのものとして意義があると考えられるようになってきたのは、時代が下って十九世紀の後半である。自然科学を自然哲学から独立させ、技術とも別領域として確立し、今の科学に近い形にするための認識論の基礎をつくった書物のひとつが、ジョン・ハーシエルの『自然哲学研究試論』（一八三〇年）だった。興味深いことに、この本の中でジョン・ハーシエルは「今日の良き科学」の一例として、<sup>\*</sup>デイヴィーが一八一五年に発明した安全ランプを挙げている。科学的方法論の哲学的基礎を与えたジョン・ハーシエルだが、「科学」の実例として取り上げているのは、このデイヴィー・ランプの他に、明るさを減じない灯台のレンズ、ヨウ素による甲状腺腫の治療と塩素による消毒法、細かい針のハヘン<sup>(1)</sup>から工場の工員を保護する磁化鋼線マスクなど、人々に安全をもたらし、生活の質を上げるものばかりである。

一方で彼は、「何の役に立つのか」という質問は屈辱<sup>(2)</sup>的だ、知識そのものを愛するのだとしつつ、人々の生活をより良いものにする成果を出すことにこそ科学の意義があるという見方、価値観が当時のイギリスではまだ、ごくふつうのものだったことをも示している。この本が出版されたのはデイヴィー・ランプの発明からわずか十五年後であり、科学と技術の区別はまだあいまいである。

当時のイギリスは、十八世紀後半に始まった産業革命が、ほぼ一段落した時期でもあった。産業革命を第二次科学革命ということもあるが、この呼び名は適切ではないと思う。<sup>A</sup>産業革命は経験主義的な技術改良の集積であり、フランス・ベイコンの「知識は力なり」路線の集大成とはいえるが、「科学革命」というよりは「技術革命」とよぶほうが適切だろう。

産業革命の技術革新の多くは、演繹<sup>えんえき</sup>的な科学的方法で達成されたというよりは、技術開発の過程で生み出されたものであり、これよりのち、十九世紀後半に「あ」を「自然哲学」から独立させ、「自然科学」を確立させていく人たちにとっては、科学の先行事例として認識されていたものではなかった。彼らにとって、科学はあくまでもいの後継者であり、技術の後継者ではなかったのである。

あるいは、ハンフリー・デイヴィーや父ハーシエルの時代には当たり前前提であった〈科学＋技術〉という枠組みを解体することで、「純粹な」科学の制度化を推進したといってもよいかもしれない。（<sup>a</sup>）、第二次科学革命というべきは、ジョン・ハー

シエルを分水嶺<sup>ぶんすいれい</sup>として、それまで一体となっていた科学と技術が分化していく過程、すなわち十九世紀後半の科学の制度化の過程であろう。

この過程を一般に科学の「制度化」<sup>B</sup>とよぶ。科学の方法論や領域がおおよそ明確になり、社会の中で活動が認知されていく状況のことだ。

何がどうなれば制度化されたと見なされるのか。よく使われる標準的な目安は以下のようなものである——専門家が集まって情報を共有するための学会や協会が安定した活動を続ける、専門の学術雑誌が定期的に刊行されて知見が蓄積されていく、専門家の人材育成をおこなう教育機関または教育課程が設置される、そこで使われる標準的な教科書が出版されて体系的な教育がおこなわれる。

自然科学の制度化は、十八世紀から十九世紀の二百年をかけて、ゆるやかに進んだとされている。その起点をどこにとるかはいろいろな考え方がありうるが、終点のほうは、十九世紀後半にヨーロッパやアメリカでおおよそその形が完成したということで科学史家の意見の相違はほとんどない。つまり、ロマン主義的な科学が退場し、哲学とは異なる科学の方法論が広く認知されて、自然科学ではなく自然科学が確立したのである。

近代の自然科学の根底には、ルネ・デカルト（一五九六―一六五〇）らの合理主義と、フランシス・ベーコンらの実証主義・経験主義とが横たわっているが、啓蒙主義<sup>けいもう</sup>の影響も強調しておきたい。知識を増やすことで人類はより賢くなり、より良い社会をつくっていくことができるという進歩の思想である。

進化論をダーウィンより早くに主張していたフランスのジャン＝バティスト・ラマルク（一七四四―一八二九）の進化観は、明らかにこの啓蒙思想にもとづいている。人間の社会や文化が進歩発展していくことを自然界に逆に当てはめて解釈し、生物も進歩的に変遷<sup>へんせん</sup>してきて人類が生物界の頂点に立っているというのだ。ラマルクは分類学者としてすばらしい業績を残し、生物進化の概念をもっとも初期に正当化した人ではあるが、彼の自然観や生物観は相当思弁的なもので、当時、彼の進化論に反対した学者のほうに実証主義的な立場に立つ人が多かったのも、むしろ当然と思える。

チャールズ・ダーウィンの祖父エラズマス・ダーウィン（一七三一―一八〇二）も、進歩的な進化論を唱えていた人だ。ロンドンの啓蒙主義サークル、ルーナー協会（月光協会）の中心人物のひとつで、近代社会は合理主義を中心思想として、キリスト教会からの影響を脱するべきだと考えていた。

同じルーナー協会のメンバーに、イギリスの高級陶磁器メーカー、ウェッジウッド社の創始者ジョサイア・ウェッジウッド（一七三〇―九五）<sup>3</sup>がいる。彼も科学的合理主義のシンポウ<sup>3</sup>者で、実証主義的手法を積極的に採り入れて陶器の製造法を研究し、それ

までにない色調の陶器の作製技術を開発していた。エラズマス・ダーウィンは彼の主治医であり友人でもあるという関係で、ウェッジウッドの娘がエラズマスの息子と結婚し、のちにチャールズ・ダーウィンを産む。ジョサイア・ウェッジウッドも、ダーウィンの祖父なのだ。

(b)、チャールズ・ダーウィンの妻もウェッジウッドの孫で、チャールズとはいとこの関係にある。そのチャールズ・ダーウィンから強い影響を受けて、進化論を普及させるのにコウケン<sup>(4)</sup>したドイツの生物学者エルンスト・ヘッケル(一八三四―一九一九)も熱烈な反キリスト教会主義者で、唯物論を徹底させた一元論の強力なイデオログとなっていく。

彼らの主張をざっくりと見ていくと、合理主義や実証主義こそ新しい時代の中心的な考え方だという思想的、あるいは社会的な理想が先にあり、それを支持するために科学的知見を利用していたことがわかる。科学の実証主義や経験主義が、哲学や神学とは異なった、独自の説得力をもつことが広く社会に共有される過程が、科学の制度化の歴史の主幹をなしているといいかえてもいいかもしれない。

科学の制度化がおおよそ完成したことを象徴するイギリスでの事例は、「科学者 *scientist*」という用語の発明である。十九世紀に自然科学の哲学からの独立性が高まってくると、(c)「哲学者」という呼称では広すぎて、その時代の科学をおこなっている者たちの思考方法の独自性を表現できないという意見が強くなってくる。それを受けて一八三三年に、哲学者のウィリアム・ヒューウェル(一七九四―一八六六)が「アーティスト *artists*」からのアナロジーで提唱した造語が、「サイエンティスト」である。ヒューウェルも、近代自然科学の方法論の確立に大きな功績を残した人で、この用語の考案にもそのことが反映している。「科学者 *scientist*」には反発も大きく、なかなか定着しなかったという説もあるが、英語の語彙が標準的かどうかの基準として信頼されている『オックスフォード英語辞典(OED)』には一八四〇年に採用されているので、反発を受けつつも比較的スムーズに受け入れられたと見てよいのではないか。

(d)、時代の流れというのはそう単純に、ある時代から次の時代へスパッと入れ替わるようなものではない。ヒューウェルが「サイエンティスト」という呼称を提唱してから三十六年後の一八六九年に、自然科学誌の『ネイチャー』が創刊されている。この雑誌は、今でこそ世界で最も権威ある学術誌のひとつとしてクンリン<sup>(5)</sup>しているが、創刊当時の位置づけは、むしろ一般向けの総合誌であり、専門家(「科学者」と知識人をつなぐ役割を担っていた。専門家向けの学術誌は、王立協会(ロイヤル・ソサエティ)の紀要など、すでに相応のものがあつたからだ。

『ネイチャー』の創刊号には、ダーウィンの進化論を擁護<sup>(6)</sup>して活躍したトマス・ヘンリー・ハクスリー(一八二五―九五)が巻頭言を寄せている。おもしろいことに、その半分以上がゲーテのアフォリズムの翻訳で、自然の造化の変化を謳<sup>うた</sup>ったこのゲーテの言

葉ほど科学の進歩を示しているものは他にないので、これを巻頭言に選んだとハクスリーは記している。

また、『ネイチャー』という誌名は、ウィリアム・ワーズワースの詩（“To the solid ground of nature trusts the Mind that builds for aye”）から採られたものだ。十九世紀後半のイギリスの科学は、啓蒙主義的科学としての体裁を整えていったのだが、その反面でロマン主義的科学の残滓もまだまだ引きずっていたのである。科学技術は複雑な生態系のようなものだから、すべてが一斉に変わることはない。あちこちが少しずつ、行きつ戻りつしながら、ゆるゆると変化を続けていく。

このような科学の成長とその潜在力にいち早く目をつけ、それを国家の発展のために積極的に利用したのが、ドイツと日本である。どちらも国家の統一と近代化がイギリス、フランスに比べると遅れ、追いつき追い越すためには科学技術が重要だという認識をもっていた。

佐倉統『科学とはなにか』

（注） \*デイヴィー……ハンフリー・デイヴィー。イギリスの化学者、発明家。炭鉱の中で使うランプとして、メタンや可燃性ガスによる爆発の危険性を減らすデイヴィー・ランプを発明した。



問一 傍線部(1)～(6)のカタカナは漢字に改め、漢字は読みをひらがなで記しなさい。

問二 空欄( a )～( d )に入る語としてそれぞれ最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。ただし、同じものを複数回使ってはならない。

- ① しかし      ② つまり      ③ そこで      ④ もはや      ⑤ もし      ⑥ せめて      ⑦ ついでに

問三 空欄 [あ] [い] に入る言葉として、それぞれ最も適当なものを一つ選びなさい。ただし、同じものを複数回使ってはならない。

- ① 技術      ② 神学      ③ 自然      ④ 科学      ⑤ 哲学

問四 傍線部A「適切ではないと思う」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 当時のイギリスは、十八世紀後半に始まった産業革命がほぼ一段落したばかりの時期だったから。  
② 産業革命は、自然を害する環境破壊の発端となった出来事であり、現代の基準では科学的とは言えないから。  
③ 産業革命は、経験主義的な技術改良の集積であり、技術革命と呼ぶほうが合っているから。  
④ 人々の生活をより良いものにする成果を出すことにこそ、科学の意義があると考えられていたから。  
⑤ ロマン主義的な科学が退場し、哲学とは異なる科学の方法論が広く認知されて、自然哲学ではなく自然科学が確立したから。

問五 傍線部B「科学の『制度化』」の説明として適当でないものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 十八世紀から十九世紀の二百年をかけてゆるやかに進み、十九世紀後半にヨーロッパやアメリカでほぼ完成した。
- ② 人々の生活をより良いものにする成果を出しつつも、広く一般市民がすみずみに至るまで、知識そのものを愛するようになること。

③ 科学の方法論や領域が明確になり、社会の中で活動が認知されていくこと。

④ 専門家の人材育成をおこなう教育機関や教育課程が設置され、標準的な教科書を用いた体系的な教育が実施されること。

⑤ 科学の実証主義や経験主義が、哲学や神学とは異なった、独自の説得力をもつことが広く社会に共有される過程。

問六 傍線部C「それ」とは何か。本文中での言葉を使い、六十字以内で述べなさい。ただし、句読点、記号も字数に含む。

問七 筆者の主張と最も合致するものを、次の中から一つ選びなさい。

① 実証主義的手法を採り入れて陶器の製造法を研究し、新しい色調の陶器の作製技術を開発したジョサイア・ウェッジウッドのように、近代社会は、合理主義や実証主義を中心思想とし、科学的知見を利用して、キリスト教会からの影響を脱するべきである。

② 人間の社会や文化が進歩発展していくことを自然界に逆に当てはめて解釈すると、生物も進歩的に変遷しており、人類は生物界の頂点に立っている。

③ 近代の自然科学の根底にあるのは、ルネ・デカルトらの合理主義や、フランシス・ベーコンらの実証主義・経験主義であるが、進歩の思想である啓蒙主義も強く影響している。

④ 実用的な価値のない科学的成果に対して「何の役に立つのか？」というのは、科学を知らない野暮な者の質問であり、知識そのものを愛するべきである。

⑤ 自然科学は真理を追究し知識を増やす活動のみに意義が見出<sup>みいだ</sup>されているが、昨今、十九世紀のように、一般社会に役立つ実用的な価値を追求する動きも出てきている。

## 問題二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わが国では古来より「ア」を自負してきたし、わが国固有の伝統技術の中に外来の流れを取り込んだうえで、残すべきものを普遍的な私たちとして結晶化してきた。ところが昨今のように、過去を劣ったものとか遅れたものとか考えられない時代が続くと、「故きを温ね、新しきを知る」といった悠長なことはやらないのか、歴史の底流に蓄積されているはずの潜在的な技術力が見落とされているようである。

技術社会の基盤の劣化は、今やあらゆるところで見ることができる。進んだハイテク技術がある一方で、企業ぐるみのミスや手抜き、はなはだしきは犯罪的行為までが頻発する。誰もが起こった問題に積極的に責任を取ろうとせず、トップが自己保身に汲々として責任を部下に押しつけたり、下請に転嫁して平然としている例も多くなった。こうなると、人々が長く拠り所としてきた社会相互の信頼が揺らぎ、安全も遠のく。多くのシステムを支えてきたはずのモラルやルールのスライタイも著しくなってきた。

時を経た職人の技術とて例外ではなく、大工といっても今や工場でイッカツ生産された外壁パネルや軽量鉄骨、加工された木材をプラモデルのように組み立てるだけだ。また左官も、タイル貼りや乾式キャストの補修、土間のコンクリート打ちや吹付防水といった工業化住宅の補完作業に追い捲られるばかりで、まともな塗り壁とか漆喰を扱うという左官本来の仕事は激減している。これらの仕事ならはつきり言って熟練技能者には必要ではない。

工業社会では一九九〇年代に入って大量生産・大量消費を前提としたものづくりから、多品種少量生産に移行する過程で、熟練した工場労働者が見直されはじめたという意見もある。事実、中小の町工場でも、大企業がなし得なかった先端技術の分野で、華々しい成果を挙げる例も見られるようになってきた。これらはいずれも工場主自らが技術者で、一定の経験を持って自ら図面を引き、機械を使いこなせるタイプであることが大きい。時にはヤスリやキサゲを使い、組立てもするからこそ、従業員も一目置くのである。

ところが建築の現場では、この熟練技術再評価の動きが一部を除いて未だに見られない。職人などという仕事を長くしていると、昨今の現場レベルの低下には深刻なものとつい考えてしまう。それは伝統建築の世界でも同じことで、基本的な構造やジュンキョ<sup>(3)</sup>すべき枠組が揺らぎ出すと案外脆いもので、その徴候はまず末端の現場にあらわれる。私たちの世界が次第に重層化し、ひたすら専門化・分業化して、末端までの一元的な管理が難しくなってきた時期と、それは一致している。

戦後、特に高度成長期以降のわが国の建築の歴史は、有体にいえば建築職人の矜持をなしくずしにしていた過程でもあった。



画一化と合理化の果てに、工夫することすら許されないまま、一個の部品として元請、下請、孫請といった重層構造の中で喘いでいる現状があることも、多くの人に知ってほしい。

職人は芸術家やその道の大家などではなく、まして趣味や道楽で何かをしているわけではない。生きるために否応なく技を身に付け、家族を養うために生業なりわいとしただけである。だからこそ一層熟練の技術と経験が大切だったのである。

昔は立派な顔の職人がいた。古い写真を見ても、親方とか棟梁とうりょうと呼ばれる人の風貌は厳めしく整っていて、威風あたりを払うものがあつた。かつて大工の棟梁や職人の親方はひとりで設計と施工を兼ねて、その職にセシユウ(4)が多かつたことも、特徴のひとつであつた。住みにくい世の中を、金はなくとも職一途のために、案外気楽に楽しんで暮らしていた、というのが当たっているのかも知れない。(イ)

その分、無器用な生き方をする者も多く、損をする人も多かつたのだろう。幸田露伴の『五重塔』は、大工ののっそり十兵衛と、その兄貴分にあたる川越源太との、谷中感應寺の五重塔の施工を巡る罅迫合つばざりあいを中心とした話だが、十兵衛は腕はいいものの処世の術に万事疎く、これといった仕事もないまま、たたき大工、穴鑿り大工と呼ばれ、「のっそり」というあだ名まで付けられて、暮らし向きも苦しかつた。このような境遇の中で、後世に名を残す大工事を完成させるための執念のあり方について、この小説には職人の心模様とともに詳しく書かれており、一読をお勧めしたい。

このように昔から職人というのは、媚こびず、寄り掛からず、俠氣わじぎを持つのが良しとされ、个性的で優れた技術を身につけて、たとえ外から見えない部分でも手を抜かず、手間をかけて仕事をするのが美徳とされてきた。(ロ)

しかしながら、特に戦後は組織の一員として、また均一な賃金労働者として効率のいい働き方が求められるようになってきた。一定の質を確保しながら生産性を高めることを目標とする効率至上主義の中で、昔気質かたぎの職人の気風も急速に失われていった。

この国の伝統的な建築技術の担い手として、多くの役割を果たしてきたと自負している古建築専門の職人も、社会的地位といった観点から見ると、その責任の重さとは裏腹に相対的な地位の低さに甘んじている部分がある。これは日常仕事をしていて感じることであるが、戦後は設計と施工が分かれて、建築家・設計者だけが脚光を浴び、実際に施工する者は、請負制度というかたちの中に埋没してしまうこととなった。

近世の棟梁や親方のなかには、実績を挙げて士分\*に取り立てられた人もいたが、その時ですら現場で仕事をしていた大部分の職人は、歴史の表舞台に出ることもなく、その存在も埋もれたままになっていた。まして現代では、これら設計と施工の分業化によって、職人のアイデンティティの喪失といった、士気の面にも影響が出ている。この国の建築文化のためにも、今後は後継者の育成の問題とともに、職人的労働の社会的な再評価を進めて、現場で実際に働く人たちをいかに顕彰するかということも大切になって

くると考える。

ところで、近頃の若い職人たちの姿から、どうも職業はカネを手に入れるための手段や方法に過ぎなく、自分の生き方と糧を得るための職業は別のように考えているフシが垣間見える。ただ、今のような時代に若者たちが将来像を結べず、職業観が確立できないのは、ある意味仕方がないともいえる。若い職人たちの親の世代からして、すでにわれわれのような手仕事からは離れた世代だからだ。

手仕事の時代には当然のこととして職人が存在していたし、それを支えてくれる社会があり、そこにはそれなりの職業観や倫理観があった。社会が大きく変質してしまった今、これらの職業観や道徳観を若者たちに要求したり、「伝統」とか「手仕事」といった聞こえのいい部分だけを、昔に戻そうというのは、少々ムシがよすぎるのかも知れない。(ハ)

「手に余る」「手を焼く」「手が届く」「手を打つ」——ものを見ることの基本は、手にとってみるということであろうか。職人の仕事の大半は、文字通り手仕事である。職人が道具の手入れを怠らないのも、道具が五感の延長であり、その五感を絶えず研ぎ澄ますために必要だからである。職人の手は、激しい労働に節くれだち、冬場などは無数のヒビやアカ切れによって、ボロボロのグローブのようになる。職人自身は寡黙な人も多いから、何を喋るでもないが、掌てのひらに刻まれたたくさんの皺しわが、彼が何をなしたか、また何をなし得なかったかを一番よく知っている。

たとえば、私たちの仕事である檜皮葺\*ひわだぶきや柿葺\*こけらぶきの仕事には、若い時には若い人しかできない仕事があり、歳をとって体が動かなくなれば、たとえ八十歳になっても仕事がある。もちろん出職\*でしやくと居職\*いしやくの振り分けによって、晴れた日も雨の日もそれなりに仕事はあるし、<sup>(5)</sup>コクシヨ(5)の夏から厳寒の冬まで三百六十五日仕事ができる。これも自然の輪廻ねに寄り添い、老若が共に生きていくための永年の知恵といふべきものである。(二)

そのためには、それぞれの仕事の役割をしっかりと果たす必要がある。若い頃なら、冬の仕事は辛いことばかりである。現場仕事では水を多く使うため、大桶が準備されている。新人の冬の朝仕事は、大桶に張った厚い氷を割るところからはじまる。檜皮というものは、水に濡らしてから屋根を葺ふく必要があるのだ、まず水を補充しておかなければならない。最初は手も血の気が引いたように真っ白になり、繰り返すうちに赤黒くただれたようになってくる。葺きの現場ではほぼ一日中水を使うので、二月などは手がちぎれそうに痛い。(ホ)

冬季の出職人の手は人前に晒さらすのすら恥はづかしく、何かの会合の前夜には、風呂などで歯ブラシに石鹼せっけんをつけて、アカギレに沿って掻かき出すようにしたあと、保湿クリームをたっぷり塗ったうえで、ナイロン手袋を填はめて寝るようにする。職人をする以上、愚痴を言ってもはじまらないが、この時ばかりは惨めな思いをしなければならない。昔から若い弟子が辞めるのは冬場が一番多く、こ

れが乗り切れば三年はもつ、といわれたものだ。

一人前になると、私たちの仕事には檜皮剥きむという工程があり、屋根葺の材料となる檜皮を剥きに森に入るが、これには森のルールがある。五月の連休前の八十八夜から約百日間は、「つわり」あるいは「おんだん」と呼ばれる端境期であり、この時期は木部の道管や維管束に根元の皮層から上がってきた水分が充満しているため、檜皮剥きは厳禁となる。この間だけは年間を通して唯一手がきれいな時期でいられるのはありがたい。

職人は年をとって屋根に登って仕事をするのがおぼつかなくなると、工房での材料作りに(6)センネンすることになる。長い間に手先の感覚だけでできるようになった檜皮の下拵ひしえをするのは結構たのしい。おしゃべりをしながらでも、ラジオを聞きながらでも、手さえちゃんと動かしていればはかどる仕事である。檜皮拵えは通称「皮切り」といい、洗皮あらいかわと綴皮つづりかわに分けることができる。洗皮は前述のように檜の立木から採取した檜皮(原皮)もとかわを檜皮包丁を使って厚みや長さを均一に揃そろえる工程で、綴皮は洗皮を包丁の先で突っついて綴じ、一定の形に整形する工程である。

私は年配の職人の手を見せてもらうのが好きだ。もちろん、太くごつごつとした手だけがいいといっているのではない。宮古島で上布を織っていた女性の手はみんな細く美しかったし、意外だったのは岩手の年配の漆掻きの職人の手がつるんとしていたこと。「何十回も何百回も剥けたんで」と言われて妙に納得した。職人の手にその生きざまを読むことにも楽しいものがある。

原田多加司『職人暮らし』

(注) \*土分……武士の身分。

\*檜皮葺……檜ひのきの樹皮で屋根を葺ふくこと。

\*柿葺……檜などの薄板で屋根を葺くこと。

\*出職……外に出かけて仕事をする職業。

\*居職……自室で仕事をする職業。

問一 傍線部(1)～(6)と同じ漢字を使うものはどれか。それぞれ最も適当なものを、次の各群の中から一つ選びなさい。

(1) スイタイ

- ① スイリ小説を読む。
- ② 栄枯セイスイは世の常だ。
- ③ 巨匠の作品にシンスイする。
- ④ スイソウガクを聴く。
- ⑤ 毎晩ジユクスイする。

(4) セシユウ

- ① シユウメイ披露を行う。
- ② 国内をシユウユウする。
- ③ 交番にシユウトク物を届ける。
- ④ シユウエキを寄付する。
- ⑤ ユウシユウの美を飾る。

(2) イツカツ

- ① ブンカツで支払う。
- ② 物事がエンカツに進む。
- ③ ホウカツ的な説明をする。
- ④ 資源がコカツする。
- ⑤ 体内にカツリヨクがみなぎる。

(5) コクシヨ

- ① 困難をコクフクする。
- ② 結果をホウコクする。
- ③ 彼はイツコク一城の主だ。
- ④ シンコクな事態に陥る。
- ⑤ あの人はいコクだ。

(3) ジュンキヨ

- ① キヨマンの富を得る。
- ② 異物をジヨキヨする。
- ③ 申し出をキヨゼツする。
- ④ 道内にキヨテンを構える。
- ⑤ トツキヨを取得する。

(6) センネン

- ① シンセンな空気を吸う。
- ② 彼はセンセイ君主の典型だった。
- ③ 選手センセイを行う。
- ④ 港でジョウセンする。
- ⑤ 深刻な大気オセン。

問二 空欄 ア に入る語として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 森の国、川の国      ② 美の国、彩の国      ③ 技の国、匠たくみの国      ④ 海の国、食の国      ⑤ 火の国、水の国

問三 傍線部A「故きを温ね、新しきを知る」を表す四字熟語を、漢字で書きなさい。

問四 傍線部B「無器用な生き方」とあるが、『五重塔』ではどのように描かれているか。最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 大工ののっそり十兵衛は、後世に名を残すために兄貴分の川越源太と錨迫合いを繰り返し、谷中感應寺の五重塔の大工事を完成させて復讐に成功した。
- ② 大工ののっそり十兵衛と兄貴分の川越源太は、腕も良く処世の術にも長けていたので、五重塔の大工事をそつなく完成させたが、後世に名を残せなかった。
- ③ 大工ののっそり十兵衛は、処世の術に疎く、これといった仕事もないまま暮らし向きも苦しかったので、頼りになる兄貴分の川越源太と万事協力した。
- ④ 大工ののっそり十兵衛は、腕はいいものの処世の術に万事疎く、これといった仕事もなく暮らし向きも苦しかったが、後世に名を残す大工事を完成させた。
- ⑤ 大工ののっそり十兵衛と兄貴分の川越源太は、これといった仕事もないまま、たたき大工、穴鑿り大工と呼ばれたが、後世に名を残す大工事を完成させた。

問五 傍線部C「職人のアイデンティティの喪失」とあるが、それはなぜ起きたのか。筆者の考えにそって、七十字以内で説明しなさい。ただし、句読点、記号も字数に含む。



問六 次の一文は、本文中のどこに入るか。最も適当なものを、①～⑤の中から一つ選びなさい。

ヒビ割れした指に水は滲<sup>し</sup>みるし、檜皮の灰汁<sup>あく</sup>がヒビや指紋の間に入って、ちよつと他人には見せられないような手になる。

- ① (イ)      ② (ロ)      ③ (ハ)      ④ (ニ)      ⑤ (ホ)

問七 本文の内容の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

- ① 現代は進んだハイテク技術があるおかげで、起こった問題に積極的に責任を取らなくても構わないので、熟練技能者は必ずしも必要ではない。
- ② 建築の現場では、大量生産・大量消費を前提とした熟練技術再評価が活発化しており、職人の活躍の場が増え、現場レベルの向上が著しい。
- ③ 昔の大工の棟梁や職人の親方は、ひとりで設計と施工を兼ねたので必ず整った風貌になり、威風あたりを払うような立派な顔になった。
- ④ 昔から職人は、媚びず、寄り掛からず、俠気を持ち、個性的で優れた技術を身につけ、手間をかけて仕事をするのが美德とされてきた。
- ⑤ 手仕事の時代には社会が寡黙な職人を支えたので、職人は五感の延長である道具の手入れを怠らず、手がボロボロになることは無かった。



